

平成22年4月31日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19530722
 研究課題名（和文） 「宗教的情操」概念の歴史と教育実践に関する基礎的研究
 研究課題名（英文） Basic Study of Religious Sentiment, its History and Educational Practices
 研究代表者
 高橋 陽一 (TAKAHASHI Yoichi)
 武蔵野美術大学・造形学部・教授
 研究者番号：70299957

研究成果の概要（和文）：1935(昭和10)年に登場した「宗教的情操」概念は、現在に至るまで論争的なテーマである。本研究では、この概念が登場する以前に「宗教的信念」などの類似する概念が、欧米の心理学や宗教学の影響を受けて教育界に登場すること、その段階からその効果や存在についての議論が発生していることを歴史的に明らかにした。また、現状の分析として、道徳副読本などでもこの概念が回避されていることを確認した。

研究成果の概要（英文）：'Religious Sentiment' is controversial topic since its appearance in 1935. We studied on this historical topic, and 'Religious Belief' was appeared before 'Religious Sentiment' under the impact of psychology and studies on religions in America and Europe, and was also controversial topic on its effect and existence. We studied on this practical topic, and 'Religious Sentiment' is not always told in the textbooks on moral education.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育思想・宗教的情操

1. 研究開始当初の背景

(1) 「宗教的情操」概念の歴史と近年の動向
 「宗教的情操」という概念は、「すべての宗教に共通する情操」と定義される特殊な概念である。欧米からの移入された宗教と教育

の分離原則（学校の世俗性）と近代日本の教育勅語体制のもとで天皇にかかわる宗教性以外は極度に制限された状況に対応し、20世紀以降アメリカを中心とした宗教心理学の影響をうけつつ、教育の制限緩和が求められ

た大正末期からの教育界の動向により誕生したものである。登場の当初から教育学や心理学における論争的なテーマとなっていたが、1935(昭和10)年11月28日の文部次官通牒「学校ニ於ケル宗教的情操ノ涵養ニ関スル件」によって教育行政上の概念として定着した。戦後教育改革においては教育刷新委員会などで議論され、答申などにも登場した。現代においては、1998(平成10)年6月30日の中央教育審議会答申「新しい時代を拓く心を育てるために」や、2003(平成15)年3月20日の中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画のあり方について」における教育基本法の宗教教育条項(旧法第9条)の見直しに関連して言及されたが、2006(平成18)年12月の教育基本法全部改正では新法第15条に「宗教に関する一般的な教養」という文言が追加されつつも、「宗教的情操」の文言は入れられなかった。

また「宗教的情操」には、大正末期に登場したころから「宗教的信念」などの類似語句が存在し、「畏敬の念」や「敬虔」などの関連づけられた多様な概念が現在に至るまで存在する。1966(昭和41)年10月31日の中央教育審議会答申「後期中等教育の拡充整備について」の別記「期待される人間像」において、「生命の根源すなわち聖なるものに対する畏敬の念が真の宗教的情操であり」という定義が登場した。1958(昭和33)年の中学校学習指導要領の「崇高なもの」が明記され、1977(昭和52)年の中学校学習指導要領からは「畏敬の念」が登場しており、今日は小中学校の学習指導要領では「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」という文言が道德の内容として規定されている。これをめぐって、「期待される人間像」のいう「宗教的情操」とみるのか、「生命」や「自然」との関

連で自然科学的に解釈するのかなどの論争的問題が生じている。さらに道德教育の新しい動向として欧米のシティズンシップ教育が注目され、欧米の宗教的内容が含まれる道德教育が紹介されるなかでさらに複雑な様相を示しているのである。

(2) 「宗教的情操」をめぐる先行研究の動向

「宗教的情操」概念の戦前期の歴史を扱った研究としては、山口和孝(1979, 1980)、鈴木美南子(1986)、家塚高志(1993)らの論文が代表的であり、研究代表者・高橋陽一による「宗教的情操の涵養に関する文部次官通牒をめぐって——吉田熊次の批判と関与を軸として」『武蔵野美術大学研究紀要』第29号1998年、1935(昭和10)年通牒の経緯を明らかにしている。

また戦後については、鈴木美南子(1990,1999)、貝塚茂樹(2003,2006)らにより戦後教育改革を中心に研究がなされている。その後について同時代的批評としては多く存在するが、研究協力者・小幡啓靖による『『宗教的情操』の教育に関する一考察』『東京大学教育行政学研究室紀要』第13号1993年などが挙げられる。

2. 研究の目的

本研究は「『宗教的情操』概念の歴史と教育実践に関する基礎的研究」をテーマとする。「宗教的情操」という概念は、戦前から現代に至る教育政策のなかで使用されつづけてきたが、その概念や教育実践などについては十分な基礎研究がなされていない。本研究はこの概念について、その経緯や定義の変遷を歴史的に研究するとともに、現在における教育実践の状況をも対象として基礎的な研究を行うものである。その成果により教育学上の概念と歴史の研究をすすめるだけでなく、教育実践と教育政策における基盤的知見を提供することを目指し

ている。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、戦前昭和期を中心的な対象とした歴史研究の分野と、広範な教育実践報告や道徳関連教材における宗教的情操概念及び関連概念の資料収集と分野にわけて共同研究として 2007 年度より 3 年間にわたり実施した。戦前昭和期を中心的な対象とした戦前戦後の歴史研究の分野としては、宗教教育に関する雑誌記事、法令関係資料、宗教団体等の機関誌や文書等の調査を行った。広範な教育実践報告や道徳関連教材における宗教的情操概念及び関連概念の資料収集と分野では、小中学校で用いられる道徳の副読本、教師用書、その他教育実践に関する図書を中心に、現在における宗教的情操関係の雑誌記事や教育関係機関の発行する雑誌や報告書などの調査を実施した。

(2) 共同研究の体制としては、研究全体の調整は高橋陽一（研究代表者）が行い、歴史研究の分野は戦前を中心に駒込武（研究分担者より連携研究者に変更）、戦後を中心に竹内久顕（研究分担者より連携研究者に変更）が担当し、小川智瑞恵（研究協力者）が協力した。実践分野については伊東毅（研究分担者より連携研究者に変更）が担当し、田口和人（研究協力者）、小幡啓靖（研究協力者）が協力した。また連絡調整実務を田中千賀子（研究協力者）が担当した。

4. 研究成果

(1) 「宗教的情操」概念の歴史

歴史的分野の調査では、とくに「宗教的情操」概念が 1935(昭和 10)年の文部次官通牒で言及される以前に登場する段階に注目した。これらは大正末期から「宗教的信念」等の様々な未定な未定着の用語で教育雑誌や教育団体の記録に登場する。とくに、「情操」

などをめぐる欧米の心理学や宗教学の成果が紹介されつつ、宗教と教育の分離原則との関係で様々な言論が発表される。こうしたなかでは、文部次官通牒段階で提起された「宗教的情操」論に対する存在論的な批判論が、この段階からすでに登場していたことが明らかになった。つまり、「宗教的情操」については、(問 1)それは本当に特定の宗教を超えてすべての宗教に共通しているか？(問 2)それは宗教にのみ依拠するものであるのか？(問 3)それはすべての人の教育において教育されるべきものであるのか？と三つの問いを置くと、「宗教的情操」論の存在自体が危うくなるという問題である。

こうした研究の到達を踏まえて、研究代表者・高橋陽一が、教育史学会第 52 回大会シンポジウム「戦後史における〈価値教育〉—宗教教育・道徳教育の過去と現在—」(2008 年 9 月 20 日青山学院大学)では、報告者として「〈価値教育〉概念の有効性を考える—「宗教的情操」論の歴史と現在—」を発表し、『日本の教育史学』第 52 集 2009 年 10 月に掲載された。

(2) 「宗教的情操」概念に関する実践及び現状

2007 年度には現行学習指導要領に基づく道徳副読本及び教師用指導書、2009 年度には新学習指導要領に基づく道徳副読本及び教師用指導書をそれぞれ 20 社前後にわたり収集して分析を行うことができた。これら新旧学習指導要領による副読本の分析を通じて、「畏敬の念」や「敬虔」という概念は教材構成においても明示されるが、「宗教的情操」論を語るものが教師用指導書で少数見られる程度であることが確認できた。こうしたことによつて、歴史的にもみられる「宗教的情操」論の困難性が、現在の道徳副読本においても確認できた。連携研究者・伊東毅が 2009

年8月9日の教育科学研究会大会でこうした新旧学習指導要領に基づく道徳副読本の分析を口頭発表した。

「宗教的情操」をめぐる教育政策の動向としては、2000年の教育改革国民会議報告「教育を変える一七の提案」、2003年の中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について」、さらに教育基本法の全部改正と、2008年の学習指導要領改正に至る動向を分析した。こうした動向から、戦後を通じて審議会答申などでは「宗教的情操」論が登場しつつも、法令レベルの明確さが求められる学習指導要領では回避されるという二重性が現在も継続されていること、学習指導要領では「畏敬の念」の規定として継承されていることを確認した。また、実践的な提起としては、教育基本法の旧法から新法に継承された宗教教育についての「宗教に関する寛容の態度」と「宗教教育の社会生活における地位」の尊重、そして国公立の学校における特定の宗教のための宗教教育の禁止、さらに新法で明確になったように「宗教に関する一般的な教養」を明確にして、「宗教的情操」概念の混乱に実践が巻き込まれない注意が必要であるとの結論に至った。こうした論旨から、高橋陽一は論文「宗教的情操論」の退潮と「伝統と文化」の可能性を『生活指導』2009年5月号を公表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 高橋陽一、「<価値教育>概念の有効性を考える—「宗教的情操」論の歴史と現在—」、教育史学会『日本の教育史学』、査読なし、第52集、2009、pp.125-129
- ② 高橋陽一、「「宗教的情操論」の退潮と

「伝統と文化」の可能性」、『生活指導』、査読なし、2009年5月号、2009、pp.96-101

[学会発表] (計2件)

- ① 伊東毅、「新旧学習指導要領による道徳副読本の変化」、教育科学研究会大会、2009年8月9日、小田原
- ② 高橋陽一、「<価値教育>概念の有効性を考える—「宗教的情操」論の歴史と現在—」、教育史学会第52回大会シンポジウム(戦後史における<価値教育>—宗教教育・道徳教育の過去と現在—)、2008年9月20日、青山学院大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 陽一(TAKAHASHI Yoichi)
武蔵野美術大学・造形学部・教授
研究者番号：70299957

(2) 研究分担者

2008年より連携研究者に移行。

(3) 連携研究者

伊東 毅(ITO Takeshi)

武蔵野美術大学・造形学部・教授
研究者番号：60351847

駒込 武(KOMAGOME Takeshi)

京都大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：80221977

竹内 久顕(TAKEUCHI Hisaaki)

東京女子大学・現代教養学部・准教授
研究者番号：90366287

(4) 研究協力者

小幡啓靖(上廣倫理財団)、田口和人(桐生大学・医療保健学部・講師)、小川智瑞恵(東京大学史史料室)、田中千賀子(武蔵野美術大学大学院博士後期課程)